



喜劇王・渋谷天外⑤

地域史研究者
三善貞司

藤山寛美を見出しテレビで競演

一世風靡するも、病に倒れ実権は寛美へ

昭和27年（1952）「松竹新喜劇」の座長渋谷天外が自作自演した「桂春団治」は、一世を風靡します。桂春団治（本連載114～116参照）が今だに落語界の天才として知られるのは、この芝居のおかげだと言われるほどの大当たりです。

「桂春団治」で酒屋の丁稚の端役を与えられ、酒の配達にいつて春団治役の天外にこき使われ、爛番（酒をあたたためたり、なにかと酒飲みの世話を焼くこと）までさせられながら、即妙のアドリブを連発しては大爆笑させたのが、無名の役者藤山寛美でした。天外はこの若者が気に入入り、周りの反感を買いながら次々に重要な役をふりあてます。しかし天外を実の父親以上に慕った寛美が、のちに新喜劇の屋台骨を背負ってからは、天外と決定的な対立をするのですから、人間とはふしぎな生きものですね。

「桂春団治」で天外が一番喜んだのは、東京でも当たったことでした。かつて曾我廼家十吾と「松竹家庭劇」をやっていたころ、自信作を持っていったのに東京では不人気でした。「そらあたりまえや。東京の客は大阪弁がわからんからな」

と十吾は気にしませんでしたが、天外は自分の笑いは全国区になっていない、質が低俗なせいやかならうかと悩んだものです。

大阪弁だらけの「桂春団治」のヒットにすっかり気を良くした天外は、かねてからの文芸路線に舵をきります。火野葦平、今東光、久米正雄らの文学作品を脚色したり、イブセンの「民衆の敵」、チャーホフの「熊」など海外の名作を翻案して、松竹新喜劇の舞台にのせます。

こんな天外の独走が、相棒の曾我廼家十吾に面白いはずはありません。十吾は15歳も年長です。公平に見ても芸ははるかに上です。不仲どころか顔つき合わせることに、天外を罵るようになりました。

昭和31年（1956）松竹新喜劇京都南座公演の中日、楽屋で十吾は天外の脚本と演技に文句をつけはじめます。その執拗なこと、からみつくこと。いつも先輩として十吾を立て、長年にわたって彼のわがままを我慢してきた天外も、つい、むきになって言い返し口論になります。

「そんなら、わいはドロンや」

啖呵をきった十吾は大事な芝居興行をおっぱりだし、松竹新喜劇からとびだして消えま

した。

翌昭和32年、十吾はかつて天外と二人で旗上げした「松竹家庭劇」を復活させ、松竹新喜劇のライバルとして、いや、新喜劇打倒をめざして道頓堀の「文楽座」で、師匠「曾我廼家十郎三十三回忌追善興行」と銘打って公演します。

十吾といえば老婆役が有名ですね。このときの出しもの「お婆ちゃんは太郎の嫁になる」は、当時流行した鈴木三重子が歌う「愛ちゃんは太郎の嫁になる」をもじったもので、観客がころげ回って笑ったほどの珍演技でした。しかし天外も負けてはいません。中座で公演した「お婆ちゃんの留守」は皮肉たっぷり喜劇で、世間の話題をさらいました。

昭和34年（1959）民間放送局は、新しい企画にエネルギーを注ぎ、テレビ時代が到来します。いちはやく潮流にのった天外は、愛弟子の藤山寛美とコンビで「親バカ子バカ」を制作放映し、大当たりをとります。日本一のアホウ役者寛美の誕生です。

もちろん天外は、シリアスな脚本も書いています。とくに同39年東京の日生劇場で公演した「わたらの年輪」は、花柳章太郎・中村雁治郎ら歌舞伎界の名優たちが出演し、改めて館直志（天外の筆名）の才能と芸術密度の高さを、天下に認めさせます。

脚本・演出・主演に座長も兼ねる天外は超々多忙、人間業とは思えないほどのハードスケジュールに追いまくられます。ついに昭和40年（1965）京都の南座で「遙かなり道頓堀」を公演中、舞台を下りて楽屋にもどった直後、脳出血で倒れました。

不幸はさらに松竹新喜劇を襲います。頼りの藤山寛美がけたはずれの借金と不行跡で、親会社の松竹から追放されたのです。やむなくミヤコ蝶々・南都雄二を招いて客演させ、なんとか座を維持しますが、天外・寛美に及ぶはずはなく不入りが続き、参った松竹は世間の手前をはばかりて謹慎させていた寛美を、わずか7ヶ月で呼び戻し、病床の天外が口述筆記した脚本と称して、「親指小指」に主演させます。

この事件で寛美は生活態度を改め、トラブルメーカーから立ち直ります。しかし座長は天外ですが名前のみ、新喜劇の実権はすべて寛美に移り、彼がいつさいをとりしきるようになりす。役者の下駄箱の順番まで、自分がきめねば気が済まないといった伝説まである寛美です。ワンマンぶりもいいところ、ホンの選別から始まって、演出・配役・装置・美術・照明まで、寛美のご機嫌次第でした。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞